

発刊100号に寄せて

代表理事 塚原 浩一

当研究所の機関誌「RIVER FRONT」が発刊から100号を迎えました。読者の皆様これまでのご支援に改めて感謝いたします。

この間、私たちの理念とビジョンに沿った様々なテーマを取り上げて皆様にお届けしてまいりました。

ここで改めてリバーフロント研究所が掲げるミッションをお示ししておきます。

ミッション 『河川・流域・水辺をいままでより良くして次世代に残す』

河川・流域の治水・自然環境・生態系、水辺のにぎわい、さらには健全な水循環系の視点から、これからの社会のあり方や価値観を提案し、その実現に向けた課題を見出し、施策提言・研究・技術開発・普及啓発などの活動を通じてその解決を図るとともに、現場実践、多様な主体との連携・協働を通じてスタンダードをつくり社会実装させる

そのために目指すビジョンは『安全で豊かな河川と水辺、にぎわいのある地域づくり』であり、具体的には

①ネイチャーポジティブ

～治水と環境・生態系のWIN-WIN関係を構築し、環境が地域の活力のエンジンとなる社会システムを目指す

②シビックプライド

～河川・水辺に品確のある伝統・文化と美しい自然景観・街並みを育み、住む人が誇りを持てる地域社会を目指す

③ウェルビーイング

～安全安心で、自然環境に恵まれ、水辺のにぎわいのある、活力ある幸せな社会を目指す

このような私たちリバーフロント研究所の理念に沿って私たち自身が活動するとともに、このことを広く読者の皆様にお伝えし同じ価値観を持つ人たちを増やしたい、そういう思いで「RIVER FRONT」をお届けしています。そして、なにより川とその自然環境・生態系、またそれらが育んできた地域の伝統や文化への敬意と愛情、そうした思いをさらに広げていきたいと思っています。

これまでの「RIVER FRONT」の役割を振り返ると、多自然かわづくり、かわまちづくりなど河川と水辺にまつわるテーマを伝え続けてまいりましたが、昨年国土交通省でなされた「生物の生息・生育・繁殖の場としてもふさわしい河川整備及び

流域全体としての生態系ネットワークのあり方」提言が大きなターニングポイントだと思います。

この提言を契機として環境定量目標など河川環境への取り組みがより具体的に動き出しています。研究者の中でもさまざまなご意見があるとは思いますが、やはり治水と同等に扱えるような具体的な目標・指標がないと実質的な取り組みが進まない、そういう危機感を踏まえた画期的な提言だと思います。

このような取り組みが進められてはじめて、ニーズに応じたさらなるデータの蓄積や取り組み事例の積み重ねが進み、技術的な発展が促される、なにより現場の技術者の川を見る目が防災一辺倒ではなく確実に変わっていく、そういう上向きのムーブメントにつながることを期待しています。

提言は環境への取り組みが防災に遅れて大きく後手にまわっているのではないかと、との危機感から河川生態などの研究者の皆さんが声を上げていただき、それに河川行政が応えてくれた結果であり非常に大きなステップです。リバーフロント研究所としても、技術開発、データ、普及啓発など多方面からこの取り組みをサポートしていきたいと考えています。

一方で、まだまだ学術的にも技術的にも未解明・未開発の部分が多くあります。生息場と生物の応答の関係は？ 流況・土砂動態など川の営力をどう評価する？ 流域としての生態系ネットワークにどう取り組む？ 水温など地球温暖化の影響は？ 見直し・モニタリング・手直しといった順応的管理をどう進める？ などなど様々な課題が現実の問題としてありますが、まずは動き出してみる、知恵を出し合って前に進めてみるのが大事だと思います。

「RIVER FRONT」においても、そうした新しいチャレンジングなテーマを積極的に取り上げていきたいと思っています。

今回の特集ではそのことを踏まえて、第一線の研究者の皆様にも自由に語っていただきました。尽きない課題、でもだからこそやり甲斐があって楽しい、進むべき未来を想像してワクワクする、本当にいい川とその自然環境を守り再生していくためのヒントを出し合おう、そういった熱気を読者の皆様にもお伝えできたらと思います。